

稲 山 会 通 信

第32号

2016年1月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

山の会創立60周年・平成28年を迎えるにあたり 「親の矜持」

ビレー解除!! ある種の緊張から抜け出し、安心感が広がる。この言葉をいかに待ち望んでいたことだろう。一昨年、“やる気のある1年生が入会し残った”。そんな状態の時、なんと“やる気のある3年生の女子も入会し残った”。昨年、この4年生と2年生がそれぞれ幹事長、副幹事長となって、素晴らしい活躍を見せてくれた。現役を見守るのも「親の責務」と感じ、「執念」をもって、その育成を「登攀」と仮想してやってきた。今年はようやくビレーを解除してもよいと思える状態にまでになってきたと信じたい。

思えば現役が定着しない時期、他の山関係のサークルでは、多数の会員がいるのを見るにつけ、聞くにつけ、何故山の会には人が来ないのか、何が悪いのか、何が間違っているのか常に考え、試行錯誤してきた。時には路線変更までもと考えた。が、60年近く、多くのOB・OGによる努力の結果が、現在の早稲田大学山の会、稲門山の会であることを考えれば、そうもいかない。長年培って来、継続して来た「愚直に山だけを求めてきた」この姿勢は崩すわけにいかない。これが山の会の「矜持」でもある。まだまだ油断はできないが、悪場は越えた。ここまで来られたのは当然、会員、役員の地道な努力以外なものでもないのである。



現役指導中の上田代表(天覧山 RCTにて)

山に登る若い人が少なくなっていると言われて久しいが、居ないことはない。居るのである。只、気が付かないだけなのだ。現に昨年末ごろになって、山の会に入会したいとアプローチしてきた者がいるし、他の山関係サークルの幹事長が、山の会で一緒に登りたいとやって来てもいる。山の会の活動が認められてきたのだろうか!! 早稲田大学の中でも「やまの会」は誇れる会になっている。これらの学生もすぐに「稲山会」に入ってくるだろう。親の「矜持」をもって、子の成長を見守ろう。

2016年1月

稲門山の会代表 上田訓央

創立 60 周年記念祝賀会（兼）新年会のご案内

1956 年（昭和 31 年）夏のこと。和田・大国・山口さん達を中心となり、大学生らしい「山の研究」と山の経験がなくても、何年生でも、また個人の志向する山登りが出来る「大衆性」を標榜するユニークな大学内山岳会「早稲田大学山の会」がスタートしました。ちょうどヒマラヤ 8000m 峰の未踏峰初登頂時代が始まった時期でもあり、日本がマナスルの 8000m を初登頂した年でもありました。「山の会」も 1958 年 6 月の三方ヶ峰の新人山行には 81 名が参加したとの記録もあり、「山の会」という大規模山岳会が活動を始めていました。

しかしその後、60 年の長い歩みは順調に來たわけでもなく、2000 年前後の数年間はまったく山岳活動をしていない時期もありました。しかしここ数年は若者たちの自然回帰と相まって、自然に親しみ、登山に興味を持つ学生が徐々に増えつつあります。「山の会」も学生数が増えており、実働会員が 20 名近くになっています。昨年 4 月に新しい学生も増え、新人合宿 2 パーティー、夏合宿 4 パーティーが成功裏に合宿を実施しています。この「稲山会通信」に写真を主とした合宿の報告を掲載してありますので、是非 OB・OG の皆様、皆様方の後輩を見てあげてください。

更に当イベントには現役学生も多数参加予定ですので、「山という絆」で繋がった後輩達と「山の話をする」楽しい時間を持っていただけるものと期待しています。是非、卒年の近い皆様と声を掛け合ってください、ご出席いただく様お願い致します。S54 年卒業以降（会員番号 267 番）の OB・OG の皆様・平成卒業の OB・OG の皆様のご出席をお待ちしております。

創立 60 周年を記念して、「創立 60 周年記念」の英文ロゴの入った T シャツ（白とライトブルーの 2 種類）をご出席の皆様にご贈呈致します。

創立 60 周年記念祝賀会（兼）新年会

日時：2016 年 2 月 13 日（土） 15:00 から

場所：早稲田大学大隅会館

会費：6,000 円（別途年会費 4,000 円）

稲門山の会役員会

副代表 井村英明

春のハイキング（丹沢シダゴ山）のご案内

新入生歓迎も兼ね、OB・現役合同で満開の桜や富士山・相模湾・丹沢山塊等の 360 度の眺望が楽しめる手軽なハイキングコースとして丹沢シダゴ山（震旦郷山）を計画しました。皆様お誘い合わせのうえご参加下さい。

日時：2016 年 4 月 10 日（日） 9 時 30 分集合

集合場所：小田急線 新松田駅 富士急湘南バス停（9 時 40 分発 寄行き）

行程：新松田ー寄ー水場ーシダゴ山ー宮地山ー寄ー新松田（歩行時間 2 時間 55 分）

幹事：新井昭夫（S46 年卒） araia@nifty.com 080-1161-5306

松村幹雄（S48 年卒） mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695

参加ご希望の方は 4 月 3 日迄に上記幹事宛にご連絡下さい。

創立 60 周年記念特集 現役山行報告

＜創立 60 周年を目前にして現役山の会の復活があり、現役山行を特集して祝します＞

現役山行報告 1 新人合宿（天狗岳～根石岳）

今年の新人合宿は日程等の都合により 2 班に分けて同じルート（渋の湯～黒百合平～天狗岳～根石岳～オーレン小屋～夏沢鉱泉）を登った。リーダー以外は山行経験が少ないメンバーが多いため OB がサポートし、現役天幕泊、OB 小屋泊で、両パーティーとも天気比較的恵まれた充実した新人合宿であった。

第 1 パーティー：5 月 30－31 日

井村 OB がトップを務め長期の縦走にも耐えるペース配分などを指導しながら黒百合平まで登りテントを設営。夕食後は 1 つのテントに集まり懇談。2 日目、東天狗岳山頂は霧で眺望効かず西天狗岳ピストンは諦める。根石岳からは学生先行で下る。茅野駅では「そば茶屋」で帰りの電車の時刻まで歓談した。
参加者：真藤（L、2 年 副幹事長）、目次（1 年）、立島（1 年）、河野（3 年）、横山（3 年）、カク（留学生）、OB：井村（S40）、新井（S46）



第 1 パーティー全員集合写真(八方台分岐にて)

第 2 パーティー：6 月 6－7 日

第 2 パーティーは女子の多いパーティーとなったが、皆元気かつ賑やかで楽しく充実した山行であった。黒百合平に天幕設営後ヒュッテ前の残雪斜面で雪上訓練。OB 持参のピッケルで滑落停止やキックステップなどの基本動作を練習。夕食後ヒュッテ前の丘で夕日見物、その後 1 つのテントに集まり持参のお菓子でティーパーティー。2 日目は東天狗岳・根石岳は霧で眺望効かなかつたが順調に下山し、夏沢鉱泉で温泉に浸かり汗を流した。



第 2 パーティー全員集合写真(東天狗岳)



黒百合ヒュッテ前の斜面で雪上訓練

参加者：今村（L、4 年 幹事長）、厚木（1 年）、森反（1 年）、川上（3 年）、マライア（留学生）、アレックス（留学生）、OB：金子（S41）、島田（S46）

現役山行報告 2 第 1 回夏山合宿（白馬三山） 7 月 27－30 日

今年は大勢の新人が入会したことから分散形式の夏合宿とすることとし、その第 1 回目を OB の山行に同行する形で白馬三山とした。大雪渓、高山植物の大群落、山頂・稜線からの大展望、鍾温泉直前のクサリ場、雲上の温泉等とバライティに満ちた山行であった。雪渓等での OB のサポート、鍾温泉幕営地での OB との交流会もあり思い出に残る楽しい山行であった。



白馬岳山頂にてポーズを取る現役



白馬大雪渓を登る

参加者：川上（L、3 年）、マライア（留学生）、張（留学生）、ネイサン（留学生）、OB: 松村(啓) (S38)、井村 (S40)、斉藤(雄) (S41)、金子 (S41)、新井 (S46)、島田 (S46)

（詳しくは特別寄稿 2 を参照下さい。編者注）

現役山行報告 3 第 2 回夏山合宿（甲斐駒ヶ岳） 8 月 3－6 日

第 2 回夏合宿として甲斐駒ヶ岳に登った。初日は日野春駅に集合し、バスと徒歩 1 時間程で尾白川溪谷のキャンプ場に到着。時間があつたので川で少し遊んでから夕食を作った。2 日目は黒戸尾根をひたすら登り、標高差 1500m を全員登り切ることができた。七丈小屋のテント場は自分たちのテントだけで、そこから富士



山を見ることができた。3 日目は 3 時に起床し 2 時間半程で山頂に到着。快晴で山頂からの眺望は素晴らしかった。その後、全員無事に北沢峠に下山した。



甲斐駒ヶ岳山頂にて

参加者：真藤（L、2 年）、金子（3 年）、佐藤（2 年）、立島（1 年）、目次（1 年）、厚木（1 年）、張（留学生）

現役山行報告 4 第3回夏山合宿（北ア縦走：槍ヶ岳～日本海） 8月18-31日

8月後半に2週間かけて北アルプスの縦走を行った。天気恵まれない日が多かったが、それだけに最終目的地の親不知の海を見た時の達成感と感激は大きかった。リーダーの真藤は全行程を踏破し、それに前半と後半のメンバーが加わる形で山行を行った。

（詳しくは特別寄稿1を参照下さい。編者注）



槍ヶ岳山頂にて(2日目)



鷲羽岳山頂にて(3日目)



唐松岳山頂にて(11日目)

参加者

上高地～親不知：真藤（L、2年）

上高地～扇沢：厚木（1年）、目次（1年）、立島（1年）

扇沢～親不知：今村（4年）、劉（留学生）

現役山行報告 5 第4回夏山合宿（鳳凰三山） 9月20-21日

夏合宿の最後の締めくくりとして南アルプス鳳凰三山縦走を行った。1日目は曇天であったが2日目は晴天に恵まれ、山頂からの素晴らしい眺望と始まりかけた紅葉が楽しめた。下山後は青木鉱泉で山行の疲れを癒した。

参加者：真藤（L、2年）大友（1年）、山口（1年）、厚木（1年）、猪又（1年）



薬師岳山頂にて



現役・OB 山行報告 1 (天覧山 RCT)

第 1 回 RCT 5 月 24 日

この日の天覧山の岩場は私達以外にも数パーティーの講習会があり、下段から上段までとても混んでいた。真藤以外の学生は岩に登るのは今日が初めて。最初は恐がっていたが、トレーニングが終わる頃には皆上手に登下降していた。ロープの結び方、懸垂下降、自己確保、クライマー確保とひと通りのトレーニングメニューを行い学習した。

参加者 現役：真藤（2年）、目次（1年）、厚木（1年）、張（留学生）、カク（留学生）
OB：上田（S33）、井村（S40）、亀田（S52）



参加した現役たち



熱心に指導する亀田 OB

第 2 回 RCT 9 月 18 日

当日は小雨降る曇天で岩が濡れて RCT には不都合な天気だったが、上田・井村・亀田 OB の熱心な指導と現役の真摯な姿勢で、今回の RCT も無事成功裏に終了した。

参加者 現役：真藤（2年）、厚木（1年）、金子（3年）、劉（留学生）
OB：上田（S33）、井村（S40）、亀田（S52）、
斉藤(雄)（S41）



上部の岩場で訓練する真藤と指導の亀田 OB



参加者集合、右上に上田・井村 OB



上田・井村 OB の指導で訓練開始

現役・OB 山行報告 2 秋のハイキング（御岳山～大岳山） 10月11日

今年はずっと続いた丹沢周辺から舞台を奥多摩に移し、御岳山～大岳山（日本二百名山）を経て馬頭刈尾根から白倉に下りるコースを歩いた。朝のうちは小雨模様だったが、ケーブルカーを降り歩き始める頃には雨も止み薄日も差してきて、所々で霧も立ちこめ幻想的な雰囲気の中、色づき始めた奥多摩の秋を楽しんだ。雨予報のため参加者が少なかったのが残念であったが、下山後はOB・現役一緒に恒例の懇親会で盛り上がり、楽しい秋の1日であった。参加者 OB:松村(啓) (S38)、古林 (S38)、笠原 (S40)、金子 (S41)、新井 (S46)、福田 (S46)、島田 (S46)、松村(幹) (S48)、現役:今村 (4年)、山口 (1年)、阿部 (今村友人)



ケーブルカーで一気に400m登ります



御嶽神社にて全員集合



現役は大岳山山頂を往復



恒例の現役・OB交流会

特別寄稿 1 現役夏合宿：北アルプス縦走（槍ヶ岳～日本海）

真藤幸暉（基幹理工2年）

8月18日（1日目）曇

上高地 7:40—横尾 10:20（11:20）—ババ平 13:50

最初の共同装備の分配がアンバランスだったので、真藤、厚木の荷物を目次、立島に渡した。

8月19日（2日目）曇・晴

ババ平 5:00—槍ヶ岳山荘、山頂 8:40（10:40）—双六小屋 15:10

親不知まで行く予定だった厚木がコースの厳しさを考慮し、他の二人と共に扇沢で下山することになった。



これから登る槍の穂先

8月20日（3日目）晴・雨

双六小屋 5:10—三俣山荘 8:20（10:35）—鷲羽岳 11:25（12:05）—三俣小屋 12:50

双六岳、三俣蓮華岳を通過した。水晶小屋まで行くつもりだったが、小屋が小さいことを考慮し三俣に泊まった。翌日の歩行時間短縮のため鷲羽岳をピストンした。

8月21日（4日目）雨・風

三俣山荘 4:25—水晶小屋 7:00

悪天候のため、休養もかねて水晶小屋で停滞することにした。

8月22日（5日目）雨・強風のち晴

水晶小屋 5:30—野口五郎小屋 7:55（9:30）—烏帽子小屋 11:30

天気は回復しそうにないので、水晶岳は諦めて前進することにした。野口五郎岳付近では、立っているのも大変な程の強風にあった。



鷲羽岳より野口五郎岳を望む

8月23日（6日目）晴・雨

烏帽子小屋 5:05—舟窪岳 10:55（11:15）—舟窪小屋 13:00

北アルプスに残された秘境のような道だった。アップダウンが激しかった。

8月24日（7日目）曇

舟窪小屋 5:10—蓮華岳 9:20（9:40）—針ノ木小屋 10:30

梯子、鎖場、トラバースなどの危険箇所はあったものの、道に迷うような危険は感じられなかった。OBから北ア随一の悪路と言われたが、それほどでもなかった。

8月25日(8日目)曇のち雨・風

針ノ木小屋 4:40—新越小屋 8:45 (9:15)—種池山荘 10:45

26日の台風の前に前半組には針ノ木雪溪から下山してもらった。皆に残りの行動食をもらった。この日、自分は単独行だった。種池山荘で後半組と合流した。台風による強風を避けるため、吹きさらしの冷池山荘ではなく、防風林のしっかりした種池山荘で幕営した。



今日は単独行(針ノ木岳山頂)

8月26日(9日目)雨・風のち晴

種池山荘 7:35—爺ヶ岳中峰 8:25 (8:35)—冷池山荘 9:35

悪天候の中、八峰キレット通過は危険だと思ったので、休息もかねて冷池山荘で停滞することにした。

8月27日(10日目)曇

冷池山荘 5:05—鹿島槍ヶ岳 6:45 (6:55)—キレット小屋 9:15 (9:35)—五竜岳 13:55 (14:15)—五竜山荘 15:05

キレット通過は天気が持ってよかった。劉さんは八峰キレットで少し手こずっていた。

8月28日(11日目)晴のち雨

五竜山荘 4:35—唐松岳 7:10 (7:20)—天狗山荘 12:00
不帰ノ嶮は、天気が持ってくれて、無事通過出来た。

8月29日(12日目)雨・曇

天狗山荘 5:45—白馬岳 10:10 (10:15)—雪倉岳 12:50 (12:55)—朝日小屋 16:40

小屋の夕飯が美味しそうだったので小屋で食べた。自分はテント、他2人は小屋に泊まった。

8月30日(13日目)雨

朝日小屋 5:00—朝日岳 5:50—梅海山荘 13:00

朝日小屋の人曰く、マムシが出るというのは数十年前の話であり、心配する必要はないとのこと。人気のないぬかるんだ道を歩いた。梅海小屋には十数人泊まっていた。自分たちも小屋に泊まった。

8月31日(14日目)雨

梅海山荘 5:45—白鳥小屋 9:25 (9:40)—親不知 15:15

2日間ずっと雨の中だったので、足がふやけてこすれて痛かった。2週間ぶりの夏の暑さや自動車の音がなつかしかった。念願の日本海に入ることができた。



親不知到着、日本海に飛び込むぞ!!

特別寄稿 2 OB 有志 白馬三山縦走 7月 27-30日

島田弘康 (S46年卒)

高山植物と雲上の温泉を満喫しようと、金子OBの呼びかけに5名のOBが応じた。これに現役組(第1回夏合宿、川上Lほか3名)も加わり総勢10人のパーティーとなった。OB組は小屋泊、現役組は天幕泊の3泊4日の充実した山行であった。以下はその山行記録です。

1日目は新宿より高速バスとタクシーを乗り継ぎ猿倉に向かう。猿倉で現役組リーダーの川上さんと合流しこの日は白馬尻小屋泊まり。小屋周辺はキヌガサソウが満開であった。



大雪溪上部で小休止

大雪溪上部で小休止が効かないため、山頂には翌日登ることとし、現役組は村営宿舎裏のテント場に幕営、OB組は白馬山荘に宿泊した。



2日目の大雪溪はシーズンとあって長蛇の列。井村OBが現役組をサポートし、軽アイゼンを装着して大雪溪を登る。出発時は小雨が降っていたが大雪溪上部に差し掛かるころには青空も見え、気持のよい雪上登山となった。お花畑を過ぎ小雪溪をトラバースして村営頂上宿舎に到着した時には霧で視界



白馬岳山頂にて全員集合

3日目は快晴で、早朝から何度となく荷揚げのヘリコプターが飛来し、800人からの宿泊客の胃袋を賄う山荘の大きさが実感できる一コマであった。朝日を浴びながら現役組と共に白馬岳山頂に登る。山頂からは槍・穂高岳や



白馬岳からの縦走路、劔岳を遠望する



雲上の白馬鍾温泉

立山・劔岳も眺望できた。白馬岳からは気持の良い稜線

歩きが続き、杓子岳、鍾ヶ岳を経てこの日は鍾温泉小屋に宿泊。稜線には高山植物が咲き乱れ、鍾温泉分岐直下の斜面はコマクサの大群落が見事であった。鍾温泉の露天風呂

で汗を流し寛いだあと、夜は現役組のテントに集合し、お茶・お菓子で現役との交流会を開いた。

4日目は小雨が降る中出発。小屋直下の雪渓は安全確保のためアイゼンを装着して金子OBの先導で下り、その後猿倉までの長い道のりは現役組先行でひたすら下った。下山後バスを待つ間猿倉荘で山行の余韻に浸りながら暫し歓談した後、猿倉発のバスに揺られて帰京した。



猿倉荘にて



鍾温泉直下の雪渓を慎重に下る

日程も無理をせず適度で比較的天気にも恵まれ、大雪渓・高山植物・雲上の温泉と大満足の山行であった。金子OBは今回の山行を踏まえ来年度の企画も考えているようである。現役組はリーダー以外の3人は留学生（米国、ニュージーランド、中国）で国際色豊かなパーティーであったが、今回の山行には満足のようにであった。なお現役組リーダーの川上さんは、このあと鍾温泉小屋で2週間ほどアルバイトをしたとのことであった。

参加者 OB：金子（L、S41）、松村（啓）（S38）、井村（S40）、斉藤（雄）（S41）、新井（S46）、島田（S46）
現役：川上（L、2年）、マライア（米国）、張（中国）、ネイサン（ニュージーランド）

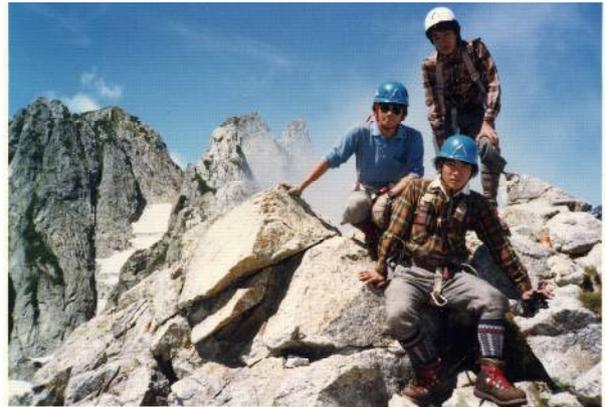


信州 諏訪住人の山登り

内山正一（S60 年卒）

山の会の現役時代に季節を問わず何度となく訪れた八ヶ岳。その麓の諏訪に本社を置く電機メーカーに就職し、そこの住人となって早や30年になります。就職先には、稲門山の会の大先輩の金子先輩がおられました。私が入社したころは既に会社の重鎮でおられ、ヒラの私が直接お付き合いするような機会もなく、初めてご挨拶させていただいたのは先輩の退職後、50周年記念誌の取材の機会でした。その後も、たまに街中や駅でお会いすると気さくに声をかけていただき、現在も山の会の先輩、後輩としてお付き合いをさせていただいています。

さて、就職後の山登りですが、山好きは学生時代と変わらずで、地元の社会人山岳会に籍を置き、子育ての（ごく短い）一時期を除いて、年間数十日程度の山行をコンスタントに重ねてきました（一応、今も現役のつもりです）。諏訪は日本のへそといわれることがあります。その例が示す通り、日本の屋根の中部山岳に取り囲まれた土地ゆえ、そこならではの山への接し方や楽しみ方が多少はあるように思います。そんな、地元で縁の山の話の思いつくままに書き連ねたいと思います。



学生時代、劔岳ハッ峰側壁登攀後六峰頂上にて一番前

「日々、眺める山々」

まずは、日々の生活で目にする山岳景観について紹介します。私の自宅は諏訪湖北岸の急な坂の上の住宅地にあって、諏訪湖を眼下に眺めて暮らしています。自宅の裏山をそのまま上がっていけば、蓼の海を経て霧ヶ峰に行き着くことができます。

そんな我が家の正面から左手（南東方向）には、鋸岳や大岩山の山稜の重なりの上に甲斐駒が三角錐の頭をのぞかせています。夏の間は霞んでうっすらとしか見えない日も多いですが、新雪を被る11月以降になると、毎朝、真っ白な頭をくっきりと見せてくれます。甲斐駒はルートを変え季節を変え幾度も通い、たびたび充実した時間を過ごした思い出のある山なので、その姿が日常とともにあるのはうれしいことです。

正面やや右手（南南西方向）には、特徴的な四角いシルエットの中央アルプス将基頭山が見えています。こちらは子供を連れて一度行ったことがあるだけですが、冬になると、その白い帽子をかぶった姿がけっこう目立ち、毎年その姿を見ては雪のあるうちに行ってみようかと思いつけています。

現在の勤務先は中央道の安曇野インターを降りてすぐの所にある事業所で、私は上諏訪から電車通勤をしていますが、その途上から眺める山岳景観は見飽きることはありません。上諏訪から中央東線に乗って諏訪湖を西に周り込むと、左の車窓に編笠山の優雅な山裾とその向こうに富士山が見えてきます。意外に思われるかもしれませんが、私が平日に見る八ヶ岳はこれが全てです。岡谷の先で塩嶺トンネルをくぐり、松本盆地に入ると一気に視界が開け、右手の車窓には蝶から白馬にかけて延々60km続く北アの屏風が広がります。冬晴れの朝、青空をバックに見る白銀の連なりはこの上の無い美しさです。そして、このパノラマは、列車が進むにつれて徐々に広がり増し、松本の一つ先、篠ノ井線の田沢駅で降車する時は、視野一杯に広がります。

その中でも、通勤路の進行方向正面の常念の存在感はひとときわ群を抜いていて、田沢駅から事業所に向けて歩き出すと、まるで常念の登山口に向けて歩き出すかのような錯覚を覚えるほどです（少し大げさですが）。強い冬型が明けた朝に、雪煙を上げる常念の姿を目にして、しばしば思い出すのは2回生の3月の春合宿の時のこと、1回生の溝尾君が、常念ピークからの下りで突風にバランスを崩し、常念乗越へ向



通勤路からの常念岳

けて大滑落をしたことです。その時は雪面に顔を出していた岩にザックからぶつかって奇跡的に止まり、幸い怪我もありませんでしたが、私の横を滑り落ちていく時の彼の呆けたような顔をいまだに鮮明に思い出すぐらい、インパクトが大きな出来事でした。溝尾君は2回生になって退会し、そのまま音信は絶えてしまいました。こうして私が通勤の途上で常念の姿を仰いで、あの日のことを思い出していることを知ったらきっと驚くでしょうね。

休日は通勤経路から離れていつもとは異なる山を眺めることができますが、その中で私が一番好きなのは、諏訪湖の東岸から、塩尻峠超しに見る槍・穂高です。私はここから見る穂高は人里から見る穂高展望の3指に入ると勝手に思っています。穂高にも季節を問わず様々なルートから登りましたが、この場所から夕焼けに黒く浮かぶ槍・穂のシルエットを見続けるうちに、あのスカイライン、すなわち主稜線をそれが最も美しく見える冬にトレースするのに勝るルートはないのではないか？と思いはじめ、やがてそれは確信（単なる思い込み）にかわりました。

でも、それを実行に移したのは、それから10年以上経った5年前のこと。それも前半部の西穂から奥穂まで、後半は手つかずのまま残っています。残る後半部を終わらせるチャンスは少ないと思いますが、体が動くうちに何とか片付けて、宿題を終えた安堵感とともにお気に入りの穂高を見上げたいと思っています。



原村から望む八ヶ岳

「登住近接」

職住近接という言葉がありますが、それに倣えば諏訪は中部山岳に関しては、登住近接の地ということになるでしょう。そのメリットはいうまでもなくアプローチの短さということに尽きると思います。私の仲間内では、八ヶ岳の西面に関しては、季節・ルート（一般道・バリエーション）を問わず日帰り山行が基本で、宿泊はそれ自体を目的にした時（簡単に言えば山での酒飲

み)以外に行くことは稀です。もちろん、交通機関が発達した現在、関東や中京圏の登山者にとっても季節を問わず八ヶ岳の日帰りは当たり前のことなのかもしれませんが、我々の場合、朝は自宅で早めの朝食をとって出発し、帰りは夕飯前に帰宅するというパターンになるので同じ日帰りでも時間的余裕は随分違うと思います。こういった傾向は、八ヶ岳に限らず中部山岳圏では、程度の差こそあれ似たり寄ったりです。

面白い例としては、私が所属する山岳会では、上高地まで自家用車で入れた時代に前徳東壁の日帰り山行が行われていました。私個人の例では、甲斐駒の戸台川本谷を日帰り遡行したことが有ります。この沢は通常は沢中一泊のルートですが、まだ日があるうちに北沢峠までおいてこられたので、泊まるのは面倒とそのままヘッドランプを点けて戸台まで下り、帰宅しました。

まあ、これらは極端な例ですが、とにかく登山口と住まいが近接しているということで、中部山岳についてはかなり楽な登山をさせてもらっているわけです。逆に言えば、このような環境に慣れてしまった我々から見ると、遠方からやってくる登山者や、とりわけクライマーの“ズク”(信州の方言で、エネルギーの積極的消費のこと)には感心させられるばかり。私は、定年後に川崎の実家に帰る可能性があるのですが、その時、果たして山に向かう“ズク”が出るのか?今は何とも言えません。



最近の写真、上高地河童橋にて右側

「地元の山 八ヶ岳」

八ヶ岳の地元といえば行政単位で見れば茅野市や原村ということになりますが、地勢や文化・風土の一体性といった見方をすると広い意味での諏訪(富士見、原、茅野、上諏訪、下諏訪、岡谷)を地元ととらえることが自然だと思います。

その地元に居を構え、その地域山岳会に所属するとなれば、八ヶ岳とはリクリエーションの範囲を越えたお付き合いをしなければならないこともあります。

そういったお付き合いの一つが年一回の清掃登山で、10月に北八ツと南八ツの西面の登山道を隔年交代でゴミ拾いします。ただ、最近山にゴミがほとんど落ちていないし、参加者は大勢いるので、私は気の向いた年にだけ参加しています。まあ、それだけ近年の登山者のゴミに関するマナーは向上しているということでしょう。但し、きれいなのは表面的なところに限った話で、実はいたるところに昔(昭和30~40年代)の負の遺産ともいべき大量の廃棄物が埋蔵されているんです。一度、そういうものをうっかり掘り当ててしまい、ゴミ拾いならぬゴミの埋戻しをやったことがありました。

別のお付き合いとしては諏訪地区遭難対策協議会(以後、遭対協)の隊員としての活動が挙げられます。遭対協とはその名が示すように、八ヶ岳・霧ヶ峰一帯の遭難防止活動(登山口補導・パトロール)や事故・遭難対応(捜索、救助、収容活動)を行う団体で、地元の山岳関係者(山岳会、山小屋、スキー場)で構成されますが、諏訪の場合は山岳会会員が中心的な役割を担っています。ちなみに、長野県内で見ると、地元の山岳会が中心を担っているのは諏訪と大町ぐらいだそうで、その他の地区は事情が違うようです。尚、全ての活動は、基本的に警察(茅野署)と一体になって実施します。

諏訪地区の山岳会に入会し、遭対協の関係者から一定の信頼を得られると（いつの間にか）隊員として登録され、活動に組み込まれていくことになるのですが、私は、これに対してできる限り距離を置くようにしてきました。その理由は、若いころの出動で大きな身の危険を感じたことがあり、ボランティアの立場にも関わらず、そういった状況に踏み込まざるをえない遭対協隊員の立場に疑問を感じたことがあるからです。そうした姿勢は、現在も基本的なところでは変わりありませんが、人手が足りない等の切迫した状況で出動要請を断れるほど遭対協活動を否定的にみているわけではありません。そんなわけで、細々とですが、自分が出動する必要性が高いと判断した要請に対しては微力ながら協力をしてきました。

そんな私が、絶対にあってほしくないけど、もし発生したら万難を排してでも出動すると決めていた遭難は、所属クラブと（縁起でもありませんが）山の会・稲門山の会の遭難です。幸い、これまではそれはなかったのも何よりでしたし、これからもそうあってほしいと心から願っています。

数年前から、同じクラブの仲間が救助隊長になり、それ以来、その身内ということもあって、遭対協活動の声がかかる機会も少しずつ増えてきました。この先、子供が手を離れたら、仲間達の負担を少しでも減らせるような方向で遭対協との付き合い方を変えていく必要もあるかもしれません。



最近の写真、瑞牆山大面岩にて一番右側

以上、取り止めのない話をだらだらと並べるばかりで失礼しました。今後も、諏訪の地の利を活かして、山登りを楽しんでいきたいと思えます。

最後に、皆さんの山登りの安全を祈念して、終わりとさせていただきます。

訃報

平成 27 年 11 月 1 日に池田隆彦さん (S36 年卒) がご逝去されました。
平成 27 年 12 月 2 日に三ツ木信二さん (S34 年卒) がご逝去されました。
故人を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

編 集 後 記

新年明けましておめでとうございます。

山の会は今年で創立 60 周年ということで、稲山会通信も模様替えして、今回の 32 号からサイズを B5 から A4 に拡大し、モノクロからカラー化を図りました。

昨年は現役の活動が活発になり、2 つの新人合宿と 4 つの夏合宿が行われました。この稲山会通信も、60 周年の記念特集として、現役の山行を取りあげました。

昨年の現役のトピックスとしては、初の女性幹事長の誕生と、9 名の留学生在がいたことです。私が現役の頃とは隔世の感があります。

この夏合宿の 1 つに白馬三山縦走がありますが、これは最初に OB の山行として起案されたものに現役が乗ってきた経緯があります。私もこの山行を起案した 1 人ですが、テントを背負った現役に小屋泊まりの OB がついてゆけず、特に私はバテました。約 50 歳の差があるとはいえ、屈辱的な結果に、もう 3000m の山には行かないと拗ねてしまいました。現役復活という記念すべき年に、1 人の老兵が山を去る (?) 事実があったことお伝えしておきます。

今回の投稿は内山正一 OB (S60 年卒) の「信州諏訪住民の山登り」です。現役の登山家であり、積雪期の西穂高岳から奥穂高岳を縦走しており、「あっぱれ」です。

昨年の秋に映画「エベレスト 3D」が公開されました。1996 年 5 月のエベレストでの遭難事故がテーマになっています。この遭難では日本人の難波康子さんも亡くなられています。稲山会通信第 1 号 (1998 年 6 月発行) に迫田泰敏 OB (S43 年卒) が「エベレストで遭難した難波さんのこと」を投稿されています。稲門山の会 HP のアーカイブス (パスワード: wmsob) をご参照ください。

では本年が皆様にとって良き年であることを祈念しつつ。

斉藤雄二 (S41 年卒) 記



エベレスト街道から雪煙舞うエベレスト&ローチェ